View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Miyagi Gakuin Women's University Repository

宮城学院女子大学発達科学研究
2021. 21. 95-108

こども園における食の体験活動における「めざす子ども像」の探索
―サツマイモを題材にした活動事例の検討―

齋　藤　彰　子[1]
鵜　川　茉　美[1]
大久保　美　紗[1]
佐　藤　佳　子[1]
足　立　智　昭[2]
平　本　福　子[2]
境　　愛一郎[3]

本研究では、食の体験活動を長期的な観点において充実したものとするために、サツマイモを題材とした活動の実践をもとに、活動におけるめざす子ども像とそのための援助や環境づくりについての探索を行う。

サツマイモに関する活動のなかでも期間が長く、子どもたちの育ちがみられると考えられる栽培活動に着目した結果、未満児ではサツモイモの実物に接する姿や畑に足を運ぶ中で虫、葉、土、野菜に触れ、様々な発見を楽しむ姿が見られた。また、以上児ではサツマイモ料理のカードづくりや室内での水耕栽培を通してサツモイモの成長を観察、害鳥による被害対策を考えるなど、子どもたちの興味・関心にあった活動がみられた。次いで、栄養士は保育者と子どもの姿を共有することを通して、食事やおやつでのサツマイモ料理の提供、子どもや保育者の要望に応じた料理づくり、農業者・保育者・保護者の連携調整などの環境づくりを深めることができた。

以上のことから、栽培時においてめざす子ども像を「たくさん触れて感じる子ども」「豊かに想像する子ども」とした。また、そのための援助では「興味・関心の持続」がポイントで、未満児では畑に通い、「触れる」「感じる」体験をすること、以上児では畑を身近に感じられる環境を工夫しながら、体験から疑問や課題を共有し探求すること、「収穫・つくる・食べる」に向けて期待・意欲を高めることであると考えられた。

Keywords：認定こども園、食育、さつまいも、全年齢参加、めざす子ども像

Ⅰ．はじめに

乳幼児期の食育については、「第3次食育推進基本計画」[1)]や「保育所保育指針」[2)]において、保育内容の一環として位置づけられている。保育施設での食育活動、特に栽培や喫食などを伴う食の体験活動については、一過性のイベントとして実施される傾向にあることが課題視され「保育所における食育の計画づくりガイド」(2007)[3)]では、食育活動を、年間を通して系統的に行う活動として編成していくことを提起している。合わせて、食育計画の作成にあたっては、第一に子どもの姿（実態）に目を向け、食を通した子どもたちの育ちに対する理解を深めることが重要とされている。総じて、保育施設の食育活動においては、各園の年間の保育計画に適切に位置づけ、園の特色や子どもの状況に応じて柔軟に展開することが求められる。

先述した通り、保育施設における食育活動に関

1. 宮城学院女子大学附属認定こども園
2. 宮城学院女子大学
3. 共立女子大学

する報告の多くは、断片的な実践の紹介に終始する傾向にあり、長期的な観点から検討されたものはまだ少ない。対して、長期的な観点を含んだ報告としては、山形県「保育園における食育の計画づくりガイドライン」[4]がある。この年間計画では、サツマイモの苗植えから栽培、収穫、料理作り、その他の制作物づくりや絵本の活用等までが具体的な事例とともに示されている。また、0〜5歳児までの全年齢が参加することを前提に、各年齢のめざす子ども像が示されている。しかし、ここに記載されるめざす子ども像は、各年齢1項目と限定されたものである。また、年間を通した活動内容についても、サツマイモの生態に基づく簡潔な紹介に留まっており、保育の展開を詳細に示すものとはなっていないという課題が見受けられる。

筆者らが勤務する森のこども園では、「不思議に思う心・感動する心・思いやりの心」を育むという教育理念にもとづき、食育活動を行っている。また、2016年に森や畑に囲まれた新園舎に移ったことを契機に、それらの自然環境を活かした独自性の高い食育活動を追求してきた[5-7]。先に示した課題を踏まえたうえで、こうした本園の実践研究の蓄積を土台に、食育活動の計画を再構築することができれば、乳幼児期の食育の充実に広く寄与できると考えた。

食育活動の一環として、野菜の栽培・収穫活動を食育として行っている施設は多くみられる[8]。なかでも、山形県の事例でも取り上げるサツマイモは、多くの実践が報告されている題材のひとつである。しかし、報告の内容を検討すると、収穫や料理作りを断片的に取り上げたものが多く、年間を通した計画が明らかにされるものは少ない。また、以上児（3〜5歳児）を対象とした活動が多く、0〜5歳児までの発達段階を見通したものとなっていない。さらに、報告の大部分が実施した内容の紹介を主としており、それらの活動により、どのような子どもの姿をめざすのか、そのためにどのような援助をすればよいのか等、子どもの育ちについて理解を深めるという観点を備えたものはさらに少数である[9]。

本研究では、食の体験活動を長期的な観点において充実したものとするために、サツマイモを題材とした活動の実践をもとに、活動における本園の「めざす子ども像」とそのための援助や環境づくりについての段階的な探索を行う。まず、サツマイモに関する活動のなかでも、5〜10月と期間が長く、子どもたちの育ちがみられると考えられる栽培活動に着目し、未満児と以上児の各年齢の学びと試行錯誤の過程について考察する。次に、活動全体を通した栄養士の業務や意識について整理し、計画や環境づくりにおける役割を明らかにする。最後に、これらの実践内容や各時期での研修内容を総括し、本園が「めざす子ども像」について明らかにする。

Ⅱ．対象と方法

1．森のこども園における「サツマイモ」を題材とした体験活動の実施

研究対象となる宮城学院女子大学附属認定こども園（以下、本園）は、仙台市郊外の水の森公園を有する緑地の一角にあり、そういった恵まれた自然環境を活かした保育を展開している。園児は0〜5歳児の合計129名が在籍し、年齢別にクラスが編成される。

保育は「？…なぜだろう、どうしてだろうと不思議に思う心」「！…すごいなぁ、きれいだなぁと感動する心」「♡…人と協力し温かく接する思いやりの心」の3つの教育目標のもと実践されている。

本園には南北2面に園庭があり、園舎東側が広大な雑木林の入口となっている。北側の園庭には8面の畑があり、自然を生かした保育の一環として栽培活動を取り入れている。例年、栽培活動は3〜5歳児（以下、以上児）クラスを中心に計画し、実施されてきた。0〜2歳児（以下、未満児）クラスでは、収穫や収穫後の食べる活動のみの参加になりがちであったが、栽培活動が食育の一環であること、また食育は保育と切り離して考えるものではなく、保育の一部として実施されるべきで

あることから、畑の栽培物に継続してかかわることができる計画の必要性を感じていた。

また、本園が幼稚園から移行した認定こども園であることもあり、以上児の保育については、伝統的に取り組んできた遊びや活動が継承されているものの、未満児の保育計画、中でも食育計画の部分では以上児の活動の流れに委ねる部分が多く、主体的にかかわる活動の希薄さが課題となっていた。

そこで、全年齢が主体的に食の体験活動に取り組むための一つとして、例年、必ず計画しているサツマイモを題材とした活動を取り上げ、記録と話し合いを重ねながら、全年齢参加の展開の在り方、その中で「めざす子ども像」を求めていくことにした。

サツマイモに関する食体験活動は例年取り組んできたが、サツマイモの活動だけを取り上げて策定した計画はない状態である。今年度は、活動の前後に各クラス、セクション（未満児部、以上児部）、全体等で定期的に話題を共有しながら、短期計画を立て、必要に応じて変更しながら進めていくものとした。主な流れは以下に示す通りである。

実施期間：2020年4月～12月
参加児童：0歳児から5歳児の全園児131名
支援者：保育教諭19名、管理栄養士1名
活動内容：
　第1期（4～8月）「植える、育てる」
　4月15日～5月15日　活動目的の共有
　5月26日　苗植え
　5月～10月　栽培
　第2期（10～12月）「収穫、つくる、食べる」
　10月20.21日　収穫
　11～12月　料理作り・食べる、リースなどの制作物作り

年度の終わりには、すべてを振り返り、次年度に向けて詳細のサツマイモに関するカリキュラムを策定していくことを本研究ならびに園内研修の最終的な目標の一つとした。

2. 対象とするデータ

活動（苗植え、栽培、収穫）における印象的な子どもどもの姿と保育者の援助について、各年齢でエピソードを作成した。その結果、苗植え15事例、栽培51事例、収穫56事例のエピソードが収集された。これらのエピソードを未満児部リーダー保育教諭、以上児部リーダー保育教諭、食育担当主任保育教諭、栄養士の4名と大学教員2名（食育・保育分野）で精査したうえで、分析および以後の研修等で使用するデータとした。

また、9月と12月に園内研修を行い、全職員でサツマイモを題材とした活動における「めざす子ども像」とそのための援助や環境づくりについて検討した。研修では、先のエピソードに含まれる「活動を通して見られた子どもの姿」「環境づくり」を抽出するワークシートを作成し、クラスやセクション単位で事例の振り返りに取り組んだうえで、今後を展望する手順で進めた。このときのワークシートおよび研修を録音した音声も分析対象とする。

3. 分析の手順

本研究は、3つの検討の複合から成り立っている。以上の共通データに基づき、以下のような手順、役割分担のもと分析作業を行った。

(1) 各年齢における栽培活動の検討方法

栽培時期のエピソード記録にある子どもの姿からの中を検討し、小見出し（大切にしたい子どもの姿）をつけて整理した。まず、セクションリーダーが作業を行い、それを基準として各担任に自身の記録を分析してもらう形をとった。エピソードの中で特に記録者が印象深いものを抽出し、研修のなかで他の保育者との協議により、考察を深めた。

(2) 栄養士の役割についての検討方法

サツマイモを題材とした活動において、栄養士が行った環境づくりを表にまとめた。加えて、研究会や研修に参加し、保育者との話し合いから栄

養士が行った環境づくりを振り返り、考察した。

(3)「めざす子ども像」の導出方法

「めざす子ども像」の土台となり得る要素が、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」[10]に含まれていると仮定し、エピソード中の子どもの姿がどの「10の姿」に関連するかを各記録者に、一つのエピソードにつき3つまで選定してもらい、その傾向を分析した。同時に、その姿に至る過程で保育者が実施した援助について、『保育用語辞典』に掲載される8種の保育の援助行為[11]のうち、どれに該当するかを記録者が選定してもらった。

Ⅲ．結果と考察

1．未満児の栽培活動の展開と子ども理解

(1) 研究のはじまり

本年の食育研究は、サツマイモを題材とするということに未満児担当職員は戸惑いがあった。土の中で育つサツマイモの成長は見えづらく、また栽培時期も長いために、どのように環境を設定すれば良いのか、子どもの興味関心をどのように引き出せば良いのか悩んだところから本研究が始まった。保育者が本研究の意義をどのように捉えながら環境設定や援助を行うかが重要であった。

(2) 0歳児　保育者の気づき

本研究の概要を初めて聞いた時、0歳児にサツマイモの題材を与えることの意味が果たしてあるのか、どのように活動を展開していけば良いのか保育者は全く想像がつかなかった。

最初にサツマイモの実物を、床に座っている子どもに手渡してみると、〇児は舐め、〇児は投げ、一見危険と思える行動を見せていた。舐める、噛む、しゃぶる等の行為によって感覚器官が発達し始めている時期であるために、何でも口に入れてしまう。また、わざわざ食べ物を与え、投げる等の遊びの道具として扱うことに保育者としては抵抗があった。そこで保育者は環境を整え、食前、子どもが椅子に座っている状態の際に「これはサツマイモだよ。」と言葉を添えながらテーブルの上に置いた。すると今度は「食べ物」ということが分かったように「口に入れる」ではなく「食べる」ようにして口元に運んだ。些細ではあるが、床かテーブルかの環境を変えただけで子どもの姿に変化が見られた。この出来事をきっかけに、子どもの興味関心を引き出し、新たな姿の発見をするためには保育者がねらいや期待を持って活動や環境を与えることが大切だということに気づいた。

その後はサツマイモの実物を見せながら畑の土を掘り「同じのがあるね。」と畑に興味が向くように言葉を掛けたり、『おおきい　ちいさい』の絵本を読み、サツマイモの葉と子どもの手を比べながら「大きいね、小さいね。」と概念を与えるような言葉を掛けたりした。そうして積極的にサツマイモを題材とした取り組みをしているうちに、子どもたちが物の存在への気づき、素朴な概念の理解、感覚や感受性が芽生え出していることに気づいた。

サツマイモの生長のみに目を向けて栽培期間を過ごそうとすると0歳児がどのように関われば良いのか悩んでしまうが、サツマイモを題材としながら、多くの体験を取り入れようとすると、子どもの意外性に気づいたり、発達が垣間見えたりすることが分かった。

(3) 1歳児　子どもを見る視点

個人差が大きい1歳児は、全員が畑に興味を抱き、自ら関わるのは難しいと考えた。そこで保育者は、まずは自身が畑に興味を持ち、積極的に畑に足を運ぶことが大切だと考えた。そうすることで子どもたちも興味を持って関わるようになり、自分の思いを言葉や動作で表現するようになっていくのではいかと考えた。

土の中のサツマイモが、どの程度生長したのかを見るために試し掘りをした際には、「サツマイモある」と土の中からサツマイモが出てくることに期待を寄せる子もいたが、別の場所で好きな遊びを始める子、他の野菜に興味を持つ子など様々だった。それぞれの姿を肯定しつつも「やはり1歳児にサツマイモを題材にした活動は難しいのではないか」と感じた。

子どもたちが好きな時にいつでも触れられるように、保育室にサツマイモの実物を用意していた。

ある日、そのサツマイモの根から葉が出ていたことに保育者が気づいた。保育者が「なんだろうね？」と子どもたちに問いかけると、興味深く触れ「かたいね」と言葉を発する子、怖がって顔をしかめる子、後ずさりする子がいた。その個々の姿がサツマイモに対して興味を示したと捉えられたため、保育者はそのサツマイモを水耕栽培として観察することにした。観察を続けると匂いを嗅いでみようとする子が見られたり、以前は触ろうとしなかった子が自ら葉に触れたりと、次第に違った姿を見せていった。最初は「なんだろうね？」と問いかけると不思議そうな表情をして言葉を発さなかった子も､指を差し「サツマイモ！」「はっぱ！」と触る姿が次第に見られるようになった。水耕栽培という環境を約2ヶ月与えたことで子どもの姿に変化が見られた。サツマイモを題材とすることが難しいと感じていたところに、水耕栽培という環境が思いもよらぬ気づきを促してくれた。

保育者がサツマイモを題材に何ができるかを常に考えたり、子どもがいつでもサツマイモに触れることができる環境を整えたりすることで子どもが自ら興味関心を持って関わるようになり、それが個々の気づきの変化につながることが分かった。今回は“水耕栽培”という同じ環境、活動を保育者が継続的に与え続けたことで、違った姿が見えてきた。子どもの気づき、変化、発達に気づこうとする保育者の視点が大切だと感じた。

(4) 2歳児　豊かな経験の重要さ

サツマイモの栽培のみに焦点を当て興味関心を引き出そうとすることは難しいと考えた保育者は、自然とたくさん触れながら豊かな体験を積み重ねることにした。

積極的に畑に足を運ぶと、夏野菜の観察を楽しみ、喜んで収穫するようになった。サツマイモの関心よりも夏野菜への関心が高かったために、目に見えて生長が分かる方がやはり目に止まるのではないかと感じた。しかし、6月にじゃがいもの収穫を行った後は、子どもがサツマイモ畑を指差し「うんとこしょしたい」と頻繁に言うようになり、サツマイモ畑への興味と収穫したいという強い気持ちが芽生え出した。じゃがいもの収穫体験により、喜びややりがいを感じ、見通しを持ちながらサツマイモの収穫へ期待が持てるようになったように思う。定期的に試し掘りをしながら土の中のサツマイモの生長を観察すると、より収穫に期待を持つようになった。

また、頻繁にサツマイモ畑に行ったことでバッタやテントウムシが生息していることに気づき、「むしつかまえよう」と自ら畑に足を運ぶようになった。図鑑を用意すると喜んで見るようになり、虫を捕まえたら図鑑で名前を調べるということを楽しむようになった。子どもたちが好んでよく読み聞かせしていた『はらぺこあおむし』から連想したように、葉の虫食いを「はらぺこあおむしがたべたのかも」と想像し、ますます絵本を好むようになった。また、畑の管理のために行った根返しにより葉が裏返しになっていることに気づくと「しろくなってる！」と色の変化に興味を示し、枯れた頃には「きいろくなった！」と発見を喜んでいた。

畑に通い続けたことで虫、葉、土、野菜などにたくさん触れ、様々な発見を楽しむようになった。発見したことや感じたことを自分なりに表現することが喜びとなり、より多くのことを知りたいという好奇心が湧いて出たように思う。サツマイモだけに着目するのではなく、サツマイモから派生する興味も大事にしながら、豊かな経験を積み重ねることが大切なことだと感じた。更に、過去の豊かな体験が、気づきを促したり、意欲を掻き立てたりすることもあるということが分かったため、日々、心を揺さぶるような経験・体験の積み重ねが大切だと思った。

(5) まとめ　未満児が栽培活動に取り組むには

サツマイモを題材とする研究は未満児にとって難しいのではないかという悩みや不安から始まったが、保育者が「サツマイモを題材として何ができるか・子どもたちがどのように関われば良いのか」を念頭に置いて保育をしてきた。そのため「サツマイモを題材にしてもこれだけの学びや育ちが

あるのだ」という保育者自身の新たな気づきや学びに繋がったように思う。

今研究に取り組んでみて感じたことは、子どもが生活と遊びの中で、意欲的に食に関わる体験を積み重ねることの1つにサツマイモの食育活動があることを保育者がよく理解し、学びや気づきを促しながら取り組むことが重要だと感じた。様々な活動を与えるのではなく、まずは畑に足を運び、子どもが興味を持ったことを継続的に続けることが大切である。同じ体験を繰り返すことで、発達を含んだ子どもの興味の変化に気づくことができる。その変化の中に子どもの学びや育ちが見えてくるはずである。子どもの気づき、変化、育ちに気づくことができる保育者の視点を持つことが必要であると感じた。

2. 以上児の栽培活動の展開と子ども理解

(1) 3歳児　個と集団

コロナ禍のため、クラスが全員での活動が可能になったのが5月末であった。以上児の保育室は畑がない園庭に面しているため、畑が子どもにとって身近ではなく気づきが少なかったところが課題であった。

これを改善する方法として環境づくりがあげられた。サツマイモは栽培期間が長いことや、土の中になる特徴を持つことから、子どもたちに興味を持続させるためには、保育者の環境構成や援助がいかに必要かわかってきたため、それらを問題視し、遊ぶ環境のエリアを畑がある園庭に変えたことで自ら畑を見に行くことを増やしていった。また、子どもたちの気づきと発見をしてもらうためにサツマイモの水耕栽培を行い、サツマイモの存在を身近に感じられるようにしたことで畑のサツマイモのつるや葉が出てきた不思議さを感じたり、葉に集まっていた虫に気づいて虫探しに夢中になったりと畑への関心が高まった。さらに発展していく活動にするために、子どもたちの気づきや発見をクラスで共有すること、そして絵本や図鑑などの教材を使うことでより、子ども同士の関わりのきっかけとなり、より深まった活動になるだろうと考えられた。

また、保育者の3歳児クラスの集団をどのように捉えていくか、保育者の認識も活動を繰り返す中で変容した。3学年の担任同士で話をした際に、3歳児クラスの活動で1人だけの意見を取り入れ、みんなの体験につなげてもいいのだろうかと悩んだと3歳児担任から問いかけがあった。クラス保育の中で、保育者は「集団で見なければならない」ということを重要視していたために、子ども個々の気づきや考えに保育者が気づけず見逃してしまったこともあったようだ。

しかし、収穫が近づいてきた時期に「サツマイモごはんたべたい」「きゃんぷしたい」という子どもの声があったことで、始めは少数の意見だけでクラス全体の活動にしてもいいのかと保育者自身葛藤があったようだったが、個々の言葉を拾い、活動を実現したことでクラスの子どもたちが充実感を味わえる活動になった。3歳児はまだまだ自分だけの世界であり、他者の意見に揃えたりすることも難しい。保育者はクラス全体を動かすことよりも、子どもたち個々に目を向け、耳を傾けることで個をよく捉えていき、発言や気持ちに気づいたら、保育者がまず共感して、深く入り込み活動に発展性を持たせることが必要だと感じられた。

(2) 4歳児　自分の考えを伝えあう

4歳児はサツマイモの栽培活動をするにあたり、サツマイモの料理を考えることで作物を育てる意欲を高められるようにしていった。自分で思いついたものを伝えることはもちろん、栄養士とのかかわりを密に持ち、豊かなサツマイモ料理について知ることで、より収穫を期待しながら取り組むことが出来た。その取り組みから自分で考えて食べてみたいと思ったものを家で作り、みんなの前で発表をしてくれた子もいた。集団で考える体験を増やすことで、集団の中で自己発揮して自信に繋がり他者の存在により思考力が広がるきっかけになったように思える。そして実際に出た給食やおやつのサツマイモ料理の写真をカードにして保育室に展示することで、常日頃からサツマイモを思い出して期待を持って栽培活動に取り組むこと

が出来た。栽培期間の長いサツマイモの関心を持続させる上で有効だったと考えられる。

また「サツマイモは土の中にできるか、それとも上にできるか」という議論になったときには、自身の畑のお世話の経験に基づいて「サツマイモは土の中にできる」と自分の言葉で伝える子もいれば、信念をもち「土の上にできる」と主張する子もいた。他者の声に耳を傾けながらも、目で確かめるまでは自分を信じたいという姿があった。育っていくサツマイモの畑の様子を観察したり、さらに試し堀りをしたりすることで土の中にサツマイモが出来た事実を知ると、友達の言っていた「土の中」という言葉の意味と実物が一致し、理解に繋がった。クラスで考えを共有することや、疑問に感じたこと、予想したことを確かめ、わかる喜びを共有するということが、集団としての「知」につながるのだと感じる。そしてそのやりとりを繰り返すことで、友達同士の信頼を生み、自分だけの世界ではなく、周りの人と共存している世界だと認識し、さらに友達と思考し、追求する面白さを感じるのではないかと考えられた。次年度にむけても、子どもたち自信が考えてそれを子ども同士で共有してみること、子どもたち自身が興味を持ち続ける為に図鑑や絵本等の教材を環境に取り入れることで、自分で調べてみようと思える環境づくりをし、意欲を高められるようにしていきたい。

(3) 5歳児　より深い学びになるために

5歳児はサツマイモの生長を観察し考えるなかで、予測し子ども同士で思考していくことにより興味深く取り組むことができた。サツマイモの生長を見守る中で、葉の数やつるの長さを数えたり器具を使うなどして数字で表して大きさを明確にすることで「おおきくなった」ことを実感し、さらに「このくらい」が何センチかわかることで数量への興味・感覚がさらに高まったように思えた。また、葉の数は栽培の始めは数えやすいが中盤から数えきれない数になったことやつるの長さに関しては、初めのうちは生長が遅いため、変化が分かりにくい等の実態があった。子どもの気づきを促すには適した時期があるということもわかった。大きさを比較して実感できる方法のもう一つとして、写真を展示することで日々の中で思い返したり以前の様子と今の様子を見比べることができると考えられたため、次年度の取り組みとして組み入れていきたい。

サツマイモを育てる上で、収穫や調理に期待をもつ姿も見られた。栽培の初期には害獣や害鳥による被害を子どもたちが自ら気づき、自分たちなりに対策を考え、意見を出し合って考えて取り組む姿があった。保育者は、子どもたちが対策を考えて試す中で、苗植えの時に畑のアドバイスをしてもらった玉浦西地区の皆さんを思い出してもらうことで、地域の人の大切さを感じてほしいと願いをもって「誰に相談したらよいか」と問いかけたが、子どもたちからその名前は出なかった。そのことから、地域でお世話になっていて生産者でもある方々との繋がりを生かしてより豊かに関わっていけるようにし、アドバイスをもらったことを思い出せるような機会を与えていくことで、栽培しながらも身近な社会で支えてくれている人々の存在を知っていくことを大切にしていきたい。

5歳児クラスでもサツマイモの水耕栽培を行っていたが、サツマイモからつるが伸びて葉が出てくるのを不思議がり、「ジャックと豆の木」という絵本と情景を重ねて「ジャックといもの木」という想像の世界を子どもたち同士でイメージし合った。水耕栽培をしたのは初めてで、どうなるかわからないような先の想像できない状況であったため、特に子どもたちなりの自由な発想が見られたように思える。そして表現したいときに表現できる環境を整えること、子どもの想像を受け止める保育者の姿勢、披露することで自分の表現を認めてもらうことで大きな自信へと繋がったため、その時の姿を見逃さずに子どもたちに応じた環境構成の工夫をしていくことが大切であると感じた。

(4) 栽培時期における環境の工夫

栽培時期においての以上児クラスで積極的に畑など環境に向かう機会を持つこと、室内でも身近

に感じられるような教材や写真を用意し、興味が持続するように工夫すること、子どもたちの言葉をひろう保育者の姿勢をもち、それらを職員同士共通認識し、子どもたちの興味関心にあった活動を展開することが大切であると感じた。

以上児の保育室は畑の園庭に面していない為、畑のある園庭に向かうことがなければ、畑の変化に気づきにくい。そのため以上児保育では子どもたちがいかに畑の作物に対して興味を持ち続けることができるのかと模索した。その中でも「サツマイモの水耕栽培」は以上児の全学年が共通して取り組んだ活動であった。

水耕栽培はサツマイモを水につけて置くだけで、葉が出てきて変化がとても面白く、子どもたちは予想していなかった現象が起きたために、想像力を引き出したり不思議に思ったりと子どもたちの興味関心を強く引き出すことができたものであり効果的であった。

(5) まとめ　以上児の栽培活動を充実させるには

以上児クラスでは、「目的をもって集団で意見を交わし考えていく」という力に結びつけるために、保育者が子どもの気持ちに気づき、寄り添うことで体験活動をより豊かにしていくことが重要ではないかと考えた。

4歳児クラスでは、前述にもあったように子どもたちが自ら提案するという、少数の子どもの発言でも積極的に取り入れることで子どもたちにとっての豊かな体験になった。4歳児クラスでは、子どもたちが期待をもって楽しく話し合いができるように実物や写真を使って問いかけることで、考えて意見を伝え合うことができた。また、保育者も介入することで、子ども同士でも考えることが可能になるとわかった。5歳児クラスでは、気づいたことを保育者に伝え、集まりの際に問題提起をする。自分たちなりに考えを伝えあい、予想したり確かめたりすることで、収穫するという目標を全体で持ち、展開することができる。

特に3歳児クラスは、初めて集団に入る子どもがおり、小集団の未満児保育を受けている子がほとんどである。未満児保育から以上児保育への接続を円滑に行うためにも、「積極的傾聴」や「共感的関わり」を重点的に意識することで子どもの気づきに反応し、寄り添った保育を展開できるように思える。また、個が自己発揮し、感情を揺さぶるような豊かな体験活動になり、共に経験した仲間との感動体験が集団として経験し学んでいく喜びにつながるのではないかと考えた。

3. 活動における栄養士の役割と気づき

食育活動が保育の一環であることを念頭に、栄養士として、保育活動の環境づくりに携わってきた。本稿では、サツマイモを題材とした活動において、栄養士が行ってきた環境づくりについて表1に示した。

表1　サツマイモ活動における環境づくり

月		3月　4月　5月　6月　7月　8月　9月　10月　11月　12月
スケジュール		計画作成　苗植え　栽培　収穫・作り食べる・保存
食事・おやつ	サツマイモ	味噌汁　大学芋　かき揚げ　揚げ野菜サラダなど計20品
	他の野菜	【玉ねぎ】ハンバーグなど計5品　【きゅうり】浅漬けなど計6品 【なす】味噌汁など計5品　【パプリカ】カレーライス　【大根の間引き菜】すまし汁など
	子どもの要望	焼き玉ねぎ　ゆでじゃがいも　ブルーベリージャム　ピザなど計19品
連携	農業者	植える場所や時期の相談　手入れの方法の助言　収穫時期・保存方法の相談
	保育者	栽培する野菜の検討　農業者と子どもの交流の日程・活動の内容の調整 畑の手入れ　収穫物を使った食の保育活動を検討
	家庭	おたよりでサツマイモ料理のレシピ掲載 ホームページに収穫した野菜を使用した料理を紹介

(1) 日常の食事・おやつ提供

①サツマイモ料理の提供

本園では、日々の食事を食の保育活動の中核として位置づけている。なかでも、献立を作成する際には、園での食事を通して、子どもたちが多様な食材や料理にふれ、食への興味が広がるよう工夫してきた。そこで、サツマイモを題材とした活動においても、年間を通して、サツマイモを使った料理を献立に取り上げてきた。また、サツマイモ料理を提供した時には、食べる時にそれがサツマイモであることを子どもたちに伝えるようにした。なかでも、苗植えから収穫までの長い栽培期間においても、関心を持ち続けられるように、味噌汁等20品の料理を提供し、サツマイモの料理を食べることを通した働きかけを行った。

②料理カードの掲示

料理づくりに興味ができてきた4歳児クラスで、「担任が『収穫したサツマイモをどんな料理にして食べたいかな？』となげかけると、予想に反して料理の名前がでてこなかった」というエピソードが聞かれた。そこで、今まで提供してきたサツマイモ料理について、子どもたちがいつでも見ることができるように、「料理名」「料理の写真」「料理の感想」をのせた「料理カード」を作成し、4歳児の保育室に掲示することにした。さらに、サツマイモ料理のレシピ集も作成した。このように、子どもたちがサツマイモ料理やその作り方について、興味をもったらいつでも調べられるような環境を整えた。

すると、ごっこ遊びの中でサツマイモ料理を作ったり、家庭でサツマイモ料理を作ったという子どもがみられた。また、そうした料理作りを友達や筆者に話してくれる子もいたことから、子どもたちのなかで、サツマイモ料理の世界が広がっている様子がうかがえた。

③サツマイモ以外の野菜栽培

本園の畑では年間を通して旬の野菜を育て収穫し、日々の食事の中で提供している。そのことにより、自分たちが主体的に関わった野菜は、スーパーに並ぶ野菜とは異なり、愛着のある特別な野菜となり、食べたときの「おいしさ」につながっている子どもの姿がみられている。今年は、サツマイモとともに、じゃがいも、なす、トマトなどの栽培を行ったが、それらの栽培や収穫の体験を通して、「サツマイモを栽培し、収穫して食べる」ということへの興味や期待が膨らんでいく子どもの姿もみられた。

(2) 子どもや保育者の要望への対応

①子どもたちの「やってみたい！」に応える

本園では、食事作りの一環に子どもたちが参加し、子どもたちが主体的に関われる環境づくりをしたいと考えている。そこで、収穫した野菜をどのように調理して食べるかは、担任が子どもたちと相談して決めることにしている。その結果、自分たちで食べたい、作りたいと思った料理の実現は、子どもたちの収穫の喜びを倍増させ、食べる喜びや調理への興味にもつながり、子どもたちのアイデアによる次の活動に展開している。

②保育者の声にも応える

栄養士は業務内容の制約から、子どもたちに直接関わることが少ないことから、保育者からの情報は貴重なヒントとなる。サツマイモの活動を始めるにあって、保育者から「子どもたち、特に3歳未満児では、料理の中に入っているサツマイモと、実物のサツマイモがつながっていないように思うので、実物のサツマイモを見せたい。」という声があがった。そこで、この要望を受けて、実物のサツマイモを全クラスに準備し、保育の中で子どもたちがサツマイモに触れる機会にしてもらうことにした。

この実物のサツマイモは、畑に持っていったり、水耕栽培に用いられたりと、クラスによって、多様なかたちで保育の教材として取り入れられていた。サツマイモは他の栽培野菜と異なり土の中にあることから、成長する実態を目で見ることができない。このことが栽培期間における子どもたちの関心を持続させにくい要因となっているが、実物を用いることで、土中のサツマイモへのイメージが膨らむきっかけになっていた。

また、サツマイモ料理の提供する日には、食事

の前に実物を掲示するようにした。そのことにより、子どもたちがサツマイモを栽培していることを意識化し、目の前の料理とつなげて味わえる環境づくりを行った。

(3) 農業者・保育者・保護者との連携

本園では畑の管理は岩沼市玉浦西地区の農業者の方々（以下、農業者）にお願いしている。野菜の栽培活動を保育として成り立たせていくためには、子どもたちの野菜栽培についての疑問に応えてくれる、これらの農業者の存在が大きい。

こども園の畑での栽培活動は、一般的な農業とは異なり、立派な野菜を育てることや収穫量を増やし効率的な作業をめざすのではなく、教育の場として、子どもの育ちに沿ったものでなければならない。

そこで、園全体の食の活動に携わる栄養士が、農業者と保育者の調整役に適していると考え、実際の活動を調整してきた。具体的には、活動の日時や子どもたちが体験したい内容を予め農業者に伝え、農業者にその日の作業を調整してもらった。また、保育者は活動の日時や作業内容に合わせて子どもたちに働きかけを行った。

これらの実践を通して、野菜などの栽培活動のなかで、子どもたちが疑問を追及したり、創造的なアイデアを具体化していくためには、子どもたちが農業者と関わる場を可能な限り設け、保育者と農業者の連携を深めていくことが重要と考えられた。

また、園での活動をより深めていくためには、保護者との連携も欠かせない。家庭においても、これらの活動が話題となり、継続されるよう、園での活動の様子をホームページで伝え、「おたより」に「サツマイモのレシピ」を掲載するなどの働きかけを行った。保護者から「レシピを見て、子どもと一緒に作りました」との声も聞かれ、活動が家庭にも波及していることがうかがえた。

(4) 実践の振り返り

本園では毎年恒例のように「サツマイモ」の栽培を行ってきた。しかし、サツマイモは苗を植えた後の手入れを必要としないことや土の中で成長することから、収穫まで子どもや保育者の話題に上がることがほとんどなかった。また、収穫後も焼き芋にして食べることが慣例となっていた。

加えて、食事を提供する上でも苗植えや栽培の時期は、旬でないことから、サツマイモを料理に使うことも少なく、子どもや保育者と「サツマイモ」を話題にすることも少なかった。このように、今までは「サツマイモ」を植え、収穫し、食べるという活動が、保育としてどのような意味があるのかについて振り返ることがなかった。

①エピソードから子どもの姿を知る

今回、この実践研究に参加し、日々の保育での子どもたちと保育者が織り成すエピソードに触れることができた。例えば、栽培期間でのエピソードから、子どもと保育者が畑に足を運び、年齢ごとにいろいろなサツマイモ畑での過ごし方があることがわかった。

具体的には、信頼する保育者の後ろをついていき、土やサツマイモの葉にふれるなどの体験を重ねる0歳児。また、サツマイモの葉の虫食いをみつけ、絵本とつなげてファンタジーの世界がどんどん広がっていく2歳児。さらに、それら絵本の世界だけでなく、現実に虫が食べたことを知っており、どうしたらそれを防ぐことができるのかの方策を考えるという、リアリティーとファンタジーの世界を行き来しながら、学びを深める以上児。これらのことから、「サツマイモ」の活動が、0歳から5歳児までの発達の流れの中でつながっていることに気づくことができたのは大きな収穫であった。

②保育者との話し合いから、栄養士としての役割に気づく

保育者と子どもの姿を共有することにより、栄養士としてどのような環境づくりをすればよいかを考え、実行してみる機会となった。

例えば、収穫後にどのような料理にして食べるかについて、保育者から「焼いも以外のリクエストがないのは、子どもたちがサツマイモの料理を知らないからではないか」との指摘があった。そこで、食事にサツマイモ料理を多く出すようにし

たり、写真付きの料理カードやレシピを提示するようにした。すると、子どもたちがどんどんサツマイモ料理に興味を示し、「このりょうりのレシピがほしい！」などサツマイモ料理に関心をよせる姿が生まれた。

さらに、保育者から「苗植えや栽培期間中は、子どもたちは収穫物としてのサツマイモとつなげてイメージしにくい」と指摘された。そこで、実物のサツマイモを保育室に置くようにした。すると、エピソード記述に、実物のサツマイモに関わるものが多く出てきて、その効果を実感することができた。

このように、エピソードをもとに、保育者と子どもの姿の意味を考えていくことを通して、栄養士がどのような環境づくりをすれば、保育として深めていけるのかがわかったことは、栄養士としての筆者にとって有意義な機会であった。

4. 森のこども園が「めざす子ども像」

サツマイモを題材とした取り組みにおいて、「栽培」は4か月に及ぶ長期間であるにもかかわらず、これまでは栽培に対しての意識が薄れがちな時期であり、到底、活動が充実していると言えるものではなかった。

しかし、本研究において、継続的にエピソード記録を収集したことにより、活動における子どもの姿や援助の傾向が見え、記録をとり続けたことにより、保育者の意識を持続できた。これは成果と言えるだろう。(前述「未満児の栽培活動の展開と子ども理解」)

ここではサツマイモの栽培の時期の事例を通して、本園の食育活動におけるめざす子ども像について考えていきたい。

(1)「幼児期終わりまでに育ってほしい10の姿」からサツマイモの栽培を考える

教育要領に示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」[12]は、そこで述べられている通り、到達目標ではなく、保育者が自らの保育を振り返り日々の保育を評価するために用いるものである。

表2は、本研究で収集したエピソード記録のすべてを記録者の主観で分析したものである。エピソード内の子どもの姿から10の姿に向かう可能性を考え、該当する項目を3つまで選択し、その数を集計した。各年齢で挙げられたエピソード数の多少や保育者個人の主観的な要素も考えられることから、全体的な傾向をみることとした。

「自然とのかかわり・生命尊重」が最も多いということは、栽培活動の性質や本園の環境からみると当然のことながら、次いで「思考力の芽生え」、「豊かな感性と表現」、「言葉での伝え合い（以上児)」が多いことが確認できた。

具体的な子どもの姿をみると、0歳児のエピソードに見る「おんなじ」「おおきい」「ちいさい」等はサツマイモに触れる中で感覚的に捉えたものであり、「思考力」に結びつく最初の一歩であると言える。また、4歳児のエピソードに見るサツマイモのできかた（地面の上か下か）における議論は個々の「思考」に始まり、その興味を持ちつづけ、試し掘りで確認するまで「言葉での伝え合い」により議論を続けている。両エピソードともに、保育者や友達との共感から個々の「豊かな表現」が見られている。

栽培におけるこれらの姿は、これまでも見られていたはずであるが、今回、エピソード記録を残したことで改めて明らかになってきた。今年度は、試行的に取り組む中で子どもの姿を記録してきたものであるため、おのずと保育の意図が表出したのではないかと考えられる。また、これらの傾向から、それぞれの保育者が、本園の教育目標であ

表2　「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」からみるサツマイモ栽培時期の傾向

時期	クラス	子どもの姿〈10の姿〉									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
栽培	未満児	2	5	2	0	2	20	30	9	14	16
	以上児	2	2	8	7	11	24	18	3	22	19
合計		4	7	10	7	13	44	48	12	36	35

1：健康な心と体　2：自立心　3：協同性
4：道徳性・規範意識の芽生え　5：社会生活とのかかわり
6：思考力の芽生え　7：自然とのかかわり・生命尊重
8：数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
9：言葉による伝え合い　10：豊かな感性と表現

る「？・！・♡の心を育む」を日常の保育の中で意識して取り組んでいるという結果といえるのではないだろうか。

(2) 食育における「めざす子ども像」とは

カリキュラムには子どもの実態把握や理解を通して保育実践への見通しをもつとともに、計画的に進めていくための共有すべき基盤となる指針や目標が必要となる。その目標となるものを「めざす子ども像」と捉え、「栽培活動の展開と子ども理解」と「10の姿」につながる傾向から考えることにする。

栽培時期に未満児、以上児ともに多くなっていたのは「思考力の芽生え」「豊かな感性と表現」である。このことから、栽培の時期には「たくさん触れて感じること」「豊かに想像すること」を大切に考え、「めざす子ども像」として求めていきたいと考えた。

①たくさん触れて感じる（未満児：触れて感じる子ども、以上児：感じたことから考える子ども）

未満児では、エピソード記述に同じ場面が繰り返し登場する。毎日同じ時間に畑を見に行く、そしてそこにサツマイモがあるかどうかを確かめるといったように、前回とちがった様子を感じ取らせたり、何も変化していないということを確認したりしていた。子どもたちには全くその意識はないが、少なからず、毎日畑に足を運ぶことで「感じ取らせたい」という意図が汲める。このような継続的な「感じる」活動は、子どもたちの認知発達を促す他、興味・関心の持続を図るものとなっていくと考えられる。

以上児では、感じたことに対し、保育者が子どもたちの考えを引き出すようにしている場面が多い。そこで、感じたことから思考につなげること、またそれを仲間と共有したり、疑問、課題の解決に向けて活動を進めたりしていく。ことが興味・関心の持続につながっていくと考えられる。

このように、「触れて感じる」「感じたことから考える」子どもの姿が、栽培の時期の大切な学びを引き出すものと考えた。

②豊かに想像する（未満児：想像を楽しむ子ども、以上児：想像したことを確かめる子ども）

未満児では、言葉は稚拙ながらも「～かも」「じゃない？」といった畑の前で子どもたちが想像する姿が多くなっている。これは保育者が事前に「土の中が想像しにくく、興味の維持が難しい」と懸念していたことと相反する姿である。子どもたちには、見えないものを想像する力があり、またそのことを十分に楽しむことを通して子どもたちなりの「仮説」が生まれた。その結果、興味・関心の持続につながっていくと考えられる。

以上児では、自らが想像したことを仮説、意見として持ち寄り、議論し、継続して畑の観察をして確かめることで結論に辿り着いている。また、想像からお話作りへと展開した例もある。そこで、現実の畑の様子が豊かな想像につながり、それが栽培の過程や収穫、収穫後の調理に期待を高めると考えられた。

このように「想像して楽しむ」「想像したことを確かめる」子どもの姿は長い栽培期間を学びの機会とするために欠かせないものであると考えた。

(2)「援助コード」からサツマイモの栽培を考える

表2では、「10の姿」と同様にその背景にある「援助」を保育用語辞典で述べられる8種の援助[13]を「援助コード」として扱い、エピソードを分析した。これも記録者の主観によるものである。

傾向を見ていくと、未満児に「言葉かけ」「見守る/待つ」といった個への働きかけが多いのに対し、以上児では「積極的傾聴」「開かれた質問」「ともに考え深め続けること」といった「思考」につながる働きかけが多いことがわかる。以上児、中でも5歳児のエピソードを見ていくと、個人に焦点をあてたものはほとんどなく、クラスや、同じことを探究する仲間のグループといった集団に対して保育者が働きかけているものが多い。

未満児は「個」で捉えられている場合が多く、以上児は「集団の一員」として捉えられているという傾向があることがわかる。これはサツマイモの栽培だけでなく、他の保育の場面にも共通して

いる可能性もある。前述の「以上児の栽培活動の展開と子ども理解」において「個」と「集団」をどう理解し、援助していくかという考察がある。3歳児がまさにその過渡期であることがよく現れている。

表3　「援助コード」からみるサツマイモの栽培時期の傾向

時期	クラス	援助コード							
		A	B	C	D	E	F	G	H
栽培	未満児	15	12	15	11	16	4	0	0
	以上児	5	13	15	10	25	13	15	12
合計		20	25	30	21	41	17	15	12

A：言葉かけ　B：見守る/待つ　C：共感的かかわり
D：応答的かかわり　E：積極的傾聴　F：開かれた質問
G：ともに考え、深め続けること
H：子どもの主体性を尊びながら教師が活動の維持・発展を支えていく上で、遊びや活動に誘う

(3)「めざす子ども像」に迫る環境構成と援助

本園でも昨年までがそうだったように、一般的にサツマイモを題材とした活動では､特に「収穫・つくる・食べる」時期の活動が充実する。それは子どもたちが分かりやすく取り組みやすい活動であり、「喜び」という感動を共有できるものであるからだと考えられる。では、なぜこれまで「栽培」の時期は活動が充実しているとは感じられなかったのか。

「未満児の栽培活動の展開と子ども理解」で述べられている通り、サツマイモという作物が土の中にできるものであること、苗植えから収穫までの期間が大変長く、興味が薄れてしまうということは一因であると考えられる。また、保育者が意識を向けていなければ、援助・環境構成の工夫が生まれず、サツマイモが難しい世話を必要とせず、比較的失敗の少ない作物であることもあって「何気なく」過ごしがちな時期であるとも考えられる。

今年度は、この栽培時期における「何気なく」を見直し、サツマイモに関するカリキュラム策定のためのトライアル期間であるということを意識して取り組むことを周知した。結果、試行的に取り入れた環境や計画がどうであったかという趣旨のエピソード記録も多く残されている。研究として取り組むことで、保育者が栽培への意識を維持しつつ、子どもたちに向き合えたことから新たな子ども像を見出す機会も増えたように思う。

12月に実施した園内研修では、年齢ごとのグループで栽培の時期を振り返り、次年度に向けての展望を協議した。どの年齢でも「興味・関心の持続」がキーワードとなった。未満児では、毎日畑に通い、「触れること」「感じること」を重視し体験することが活動のポイントとして挙げられた。その中では「発達の個人差」がキーワードとなり、「個」への援助を重視する中で体験が豊かになっていくのではないかという意見が出た。以上児では、畑を身近に感じられる環境の工夫を図りながら体験から疑問や課題を共有し、探究を続けること､「収穫・つくる・食べる」時期に向けて期待・意欲を高めていくことが学びにつながるのではないかという協議結果となった。

参考文献

1) 農林水産省：第3次食育推進基本計画（2016）
2) 厚生労働省：保育所保育指針（2017）
3) 財団法人こども未来財団：保育所における食育の計画づくりガイド（2007）
4) 山形県：保育園における食育の計画づくりガイドライン（2011）
5) 佐藤佳子、平本福子：こども園における自然環境を活用した食体験の検討　～野外での食事の意義と課題～、宮城学院女子大学生活環境科学研究所研究報告、第50巻、41-45、2018
6) 平本福子、境愛一郎、齋藤彰子、佐藤佳子、鵜川茉美、足立智昭：こども園における自然環境を活かした食体験活動―栄養士と保育教諭の連携から―、宮城学院女子大学発達科学研究、第19号、89-100（2019）
7) 境愛一郎、齋藤彰子、佐藤佳子、鵜川茉美、平本福子、足立智昭：こども園の自然環境を活かした食体験活動のあり方―現実の食体験と森での「ごっこ遊び」（「もりのおりょうりてん」）の関連性―、宮城学院女子大学発達科学研究、第20号、19-30（2020）
8) 高橋比呂映・平本福子：保育士が捉える自園の食育内容～宮城県「保育士等キャリアアップ研修」にお

ける質問紙調査から～、栄養学雑誌第 66 回日本栄養改善学会学術総会講演要旨集、第 77 巻　第 5 号、p.227（2019）
9）及川香音、佐藤彩乃：こども園における「サツマイモ」を題材とした全年齢参加の食育の取り組み宮城学院女子大学生活科学部食品栄養学科卒業論文（2020）
10）内閣府・文部科学省・厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2018）
11）秋田喜代美監修　保育学用語辞典（2019）
12）前掲（10）
13）前掲（11）